

も常に主人公に対してある課題を与えている——人物たちにとってそれは運命に値する大きな力であつたろう——この力に主人公たちが、どのように取り組み、その支配下での人生を織りなしていくか、その度ごとに絶えず作者自身も試行しているとも言えるのではなからうか。

注

1) H. House : *Dickens World*, p. 156

2) Robert Garis : *The Dickens Theatre*, p. 68

「ディケンズの人物たちはたとえそれが良い者であっても、悪い者であっても我々の前に登場すると自分たちの存在証明 (identities) をしようと努力している」と書かれている。

3) Buckley : *Season of Youth*, p. 48

時と対面している。この小説の最初から最後まで、語り手が主人公に対してある種の距離感を持ち得たこと、言いかえると自分が自分の過去に対してなぜこのように冷静で、分析的で、断固としていて、感情的に流されずにいられたかということ、このことに対する答えをここで得ることができた。この小説を包む乳白色の霧は、ピップの過去を鮮烈な色によって浮かび上らせることを拒み、常に乳白色のすりガラスを通して物語が語られ、写し出されている印象をわれわれ読者に与えている。この霧こそピリップ氏とピップを大きく隔てて、決して一緒にすることのない時の壁なのである。マグウィッチが止めることのできない時の流れについて次のように述べているのは興味深い。

「わしが今こうして掴んでいる川の底を見通すことができないのと同じように、これから先の何時間かの先の奥を見通すことができないのさ。それから、わしがこの川の流れを掴まえておくことができないのと同じように、その数時間の時の流れも掴んで放さないでおくことはできないのさ。そら、川の流れはわしの指の間からすべり出してしまふ。ほら、見てごらん」と水がぽとぽとと滴り落ちる手を挙げてみせながら言うのだった。(54章)

「大いなる遺産」において主人公が対決している力は、川の流れに譬えられているこの流れ過ぎていく時である。語り手は主人公がその力であり運命でもある時に対抗していく姿を冷静に沈着に描写している。人間たちが時の落とし子であるような夢に挑み、翻弄される姿をさまざまな角度から描写しているのがこの小説である。

デイヴィッドにおいては運命とも言うべきものは作者の作った道徳的枠組であり、読者の持つ正義の心であった。そのために、ひと度人物がその枠組からはみ出すような言動をとると、たちまち運命の操り手である作者の怒りが罰を与えるのである。そして主人公は常に人間のあるべき理想の姿をとり、禍は「私」の上にまで及ばない。禍の波はひたひたと彼の足元まで押し寄せてはくるが、彼の頭上にかかることなく、またひたひたと引いていくのであった。デイヴィッドにとって運命は切り開かれるものではなく、自然と開かれる扉のようなものである。彼は自分で運命を打開しているつもりであっても、その実は運命に積極的に闘いを挑んだことは一度もなかった。そして、第二の「私」、エスターにとって運命というべき力は彼女自身の生れる以前から存在しており、彼女の人間性そのものをも否定しきってしまうほどに強い力である。自分が自分を信じられなくなって、狂気寸前の所まで彼女の運命は彼女を追い詰めていく。彼女はデイヴィッドと違って、その目に見えない力に対して消極的ではあるが必死で闘っている。そして、同時に闘いつつ自己を必死で守ろうとしている。エスターが最後にそのような巨大な力の道徳的、精神的剝奪に対抗しうる自分を確立できたとき、嵐の跡の自然の息吹きのように、若々しい新しい力を運命が彼女に与えてくれるのである。そして、最後の「私」、ピップは冷静に彼の運命というべき時の流れを見つめている。彼にとって時と対抗することは、すなわち運命と対決することでもある。成人した大人の語り手ピリップ氏の冷静さは、デイヴィッド、エスター等とはまた異質の、見えざる力に相對し、そしてその力に巻き込まれながらもやがて自己の生き方を見つけることのできた後での安らぎの心境を伝えている。ディケンズはピップに至って、運命を人間の手で捕えることのできないものとして感じている。川の流れのように掴まえることのできない時の流れに流されながらも、人間一人一人がそれぞれの人生を見つめ、自己を確立していかななくてはならないと悟ったように思われる。

以上のように、「私」が主人公となって語られている三つの小説について、主人公と運命とのかかわり方を考察してきたが、三つの個性をもって語られているのを再考するにつけても、改めてディケンズ芸術の偉大さ、きめ細かさを見せつけられた感じがする。ディケンズはどの場合で

それに基づいて生きている。そんなとき、時は肯定的な時間となり、未来へと接続した掛け橋としての姿をとることが可能となる。マグウィッチの時に対する態度は決してハヴィンシャムやミセズ・ジョーの自我中心的なものではなく、それとは全く異ったものだということはさらに次の引用によってもわかるであろう。

ときどき私は彼の様子や、一言二言もれる彼のささやき声から、境遇さえよかったら、もっと善良な人間になったかも知れないのだと考えているのではないかという印象を受けたこともあった。とはいえ、彼はそのようなことをほのめかして、自分を弁解したり、あるいは自分の過去をその永劫の姿からひき曲げたりしようなどとは、決して思いもしなかった。(56章)

このようにマグウィッチにとっての過去は、たとえどんなに汚辱に満ちていようとも、永劫の姿をしているのである。ミセズ・ジョーやハヴィンシャムのように恨みや不満の巣窟ではない。マグウィッチの過去は神聖で侵すべからざるものであって、その上に現在、未来と積み重ねられていく、彼の心の基点となっているのである。

人間は誰も自分自身の心の中におとぎの国を持っている。マグウィッチもハヴィンシャムもミセズ・ジョーもピップもそうである。しかし、その中にあってマグウィッチだけが“時”の持つ神秘性の中に精神を住まわせている。彼の夢には彼の魂も住んでいる。彼は時間を前向きに生き、彼の半世では徳と精神とが同じ歩調で未来へと進んでいる。過去に対する怨みと忘恩の気持は両方とも人間の道徳観をも精神をも歪めてしまい、何よりも人間の時間的感覚を鈍らせ、狂わしてしまふ。怨み、憎む心を正常な健全な方向へ向かわせるのは、ただ人間の許しを求める姿だけのようである。ミス・ハヴィンシャムもミセズ・ジョーもピップにあって、自分の心に怨み、憎しみ、忘恩の念が潜んでいる限り、安息の時を持つことができない。そればかりか、それらマイナスの情熱が遂には彼ら自身の精神をも肉体をも蝕み、死に至らせる運命を荷なっている。このことはハヴィンシャムが全身火だるまになり、焼けただれてしまうことから、ミセズ・ジョーがオーリック(Orlick)に殴打されて、言葉を発することも身体を使うこともできなくなってしまう死に至ることからも証明されている。加えて、彼らのマイナスのパッションは、自分たちの心と肉体を侵していくだけでなく、周囲の人間の心をも不健全な方向に引き込んでしまっていることも見逃せない。ミセズ・ジョーが幼いピップの性格的欠陥や弱さ、不安定な感情などの芽ばえに大いに責任があることは前にも述べた通りであるが、ミス・ハヴィンシャムの方もエステラという誰でもがそれとわかる、憐れな犠牲者を作り出している。ミス・ハヴィンシャムやミセズ・ジョーが死を直前にして初めて許しを乞うとき、すでに“時”が彼女たちの肉体を滅ぼし去り、魂だけががすかに安息の地を求めてさまよっているのである。彼女たちの許しを乞う声は、永遠の時である死によって初めて成就されたと言えるだろう。しかし、現実には彼女たちの精神はすでにずっと以前に、時を否定したときに生きながら死んでいる状態にあったということも真実である。

ピップの野望に満ち忘恩に支配されたロンドンの一時期は、彼の生涯において消費と遊びに明け暮れた一時期であった。ピップにとってもロンドンのえせ紳士としての生活は“失われた時”であった。この時期の彼の盲目的な受身的な生き方、優柔不断で己れを律することを知らぬ生き方は時を無意味に浪費することに通じ、時を無駄に失うことは人間にとっては己れを失うことに通じているのである。語り手ピリップ氏は、彼の青春時代に費した“失われた時”を求めて自伝を綴っている。前にも述べたように、失われた時を求めて過去を振り返り、自分を責め、分析し、自分を憐み、過去の自分と一緒に苦しみ、また批判を下すことは、自己に到達する再確認の巡礼の旅であった。そして、一つ一つのでき事、感情の記録の頁ごとにもう一度自己を確認しながら、

そしてミセズ・ジョーはピップがハヴィンシャムの所に行くようになれば、必ず有利なことが起こるという期待をしている。ミセズ・ジョーの満たされない過去の意識は彼女の権力意識を強めるとともに、まわりにも罪の意識や恩知らず、劣等感などの種を播き散らすという相乗効果を持っている。

ピップは生れたときから姉に邪魔者として扱われ、「まるで理性や宗教や道徳の命令に背き、最善の友人たちの説得に逆らって強引に生れ出たかのように」扱われていた。ピップが彼の姉によって受けた圧力と罪を被せられ転嫁されることが、ピップの人間性を作る上に非常に影響力を持っている。彼の病的なまでの罪の意識と敏感な道徳的臆病さは、姉の権力意識によって芽ばえさせられ、彼女の遂げられなかった期待への恨みによって、決定的に彼の性格の中に根づかせられ、それらの要素が姉の持つ俗物根性と、また彼自身の持つ不正に対する過敏性と、そしてジョーから受けた美德の力とからみ合って、融合して、ピップの性格の複雑な核を形造っているのである。ピップの大きい期待は彼一人の野望ではなく、こうした彼自身の性格的傾向と、姉ミセズ・ジョーやパンプルチュック伯父やウオプスル (Wopsle) やハッブルス (Hubbles) たち、要するに彼を取り巻く大人たちの影響を受けて大きくなり、マグウィッチやハヴィンシャムの利己的な目的やピップ自身のエステラへの憧れとも重なり合って、どんどんと風船玉のようにふくれ上っていくのである。*Season of Youth* で Buckley がピップが孤児であるということは、今までの伝統的であった独立心や自信を主人公の中に染み込ませる目的のためには、何の役にも立っていないばかりか、明らかに彼の心の中の恨み心を養い、自主性を欠除させる根源となっていると書いているが<sup>3)</sup>、その通りであろう。確かにピップが親なし子であるということ、つまりピップの場合姉の世話にならなければならないということ、は独立心を鍛えるというような単純でストレートな結論をもたらしてはいないのであった。姉の与えた社会的な劣等意識と道徳的な罪の意識はすでにピップの性格の中に、幼い頃から後で芽ばえるべきマイナスの要素を植えつけていた。その意味で、孤児であるということが他の孤児と違うピップ的な意味を持っていると言えるだろう。

### III

幼いピップに時間を否定的に使うことを見せたのがミセズ・ジョーとミス・ハヴィンシャムであるとすれば、彼に時間の肯定的積極的な使い方を身をもって示したのがマグウィッチであろう。彼がピップに与えた好意の産物——彼を金の力で紳士に育てあげること——は決して純粋で汚れない目的ではなかったかもしれない。自分が紳士階級でなかったために受けたたくさんの屈辱や恥かしめに対して、ピップを紳士にすることによって代償のカタルシスを味わおうとしたマグウィッチの“企て”は、決して純粋とは言えないが、その目的のためにとった彼の行動はどんな人間をも感動させるだけの美しさと潔さがある。犯罪者マグウィッチの過去は神から見放され、社会からのけものにされた獣のような生活であった。彼は自分の心の“息子”が自由に自分の運命と存在を創造していく姿を見たいと思った。過去において受けた小さな子供の示した無邪気な親切心に対する、犯罪者の率直な感謝の気持となり、やがて子供に対する崇拜の気持と愛情へと変わっていった。過去の一点に起こったほんの一瞬に過ぎない、人間と人間との邂逅の瞬間が一人の人間をして時間に対する積極的な意識を持たせ、人生の意義を見つけさせたのである。それからの彼の生活は汗と泥にまみれた労働の連続であったが、時間を肯定し、過去に感謝し、未来の夢に賭けて現在の苦しみを乗り越えていこうとする気高さがマグウィッチの心がけの中には見られる。マグウィッチは他の人間の中に人間としての尊厳と、尊敬に値する宝物を見つけ出し、

な夫に対する、全く筋違いのねじ曲った恨み心を作り出し、彼女はこの二人を迫害し傷つけることで自分が達成されるべきであった夢が壊れたことへの責任のなすりつけをしている。彼女は小さな弟の母親として、また人のいい鍛冶屋の女房として、家庭のきりもりをしたり幼い弟の面倒を見たり、現実には相当の苦勞をしているにもかかわらず、自分の期待が理想通りに満たされなかったというだけの理由で、外から見たらけなげな逞しい女性として映るはずの苦難に満ちた過去を、自分の手で暗く汚辱に満ちた過去にしまい、その影を現在に至るまでひきずり続けている。そのために、やさしい母親とかいがいい主婦とを象徴するはずの結婚指輪とエプロンは、彼女にとって自分がいかに二人の犠牲となり苦勞しているかという彼らと世間に対する動かぬ証拠品となり、彼女が夫と弟の二人と戦う上での最大の武器でもあり、それによって有無を言わず絶対的勝利を勝ち取るための精神的な錦の御旗ともなっている。これらによって彼女は自分の家庭での地位を絶対のものとし、夫と弟とを支配して専制的な権力を誇っているのである。

そのエプロンは、二つの耳によって背中にくくられていて、前には四角な金城鉄壁ともいべき胸あてがあり、ピンや針がいっぱい刺してあった。彼女はそんなにしょっちゅうエプロンをつけていることを、自分にとっては非常に美德であり、ジョーにとっては不面目なことであると考えていた。しかし、一体、彼女はなぜそれをつけなくてはならなかったのかという理由、いやむしろよしんばそれをつけるとしても、なぜ毎日とりはずしてはいけなかったのかという理由は、私には遂にわからなかった。（2章）

「私だって鍛冶屋なんかのおかみさんになったり、エプロンもはずしたことのない奴隷になったりしてなかったら、キャロルの一つも聞きに行ったことだろうに」とミセズ・ジョーは言った。「私はね、これでもとてもキャロルが好きなんだよ。だからこそ、いまだに一つも聞いていないんだよ。好きなことといったら、何一つできやしないんだから。」（4章）

彼女はまるで鷲が小羊に飛びかかるように、私に飛びかかってきて、私の顔を流しの木の水鉢の中に押し込み、頭を水樽の蛇口の下に入れ、石鹸をつけ、もみくしゃにし、タオルでふき、こずき、耙でもかけるように櫛で搔きむしり、手荒くこすったので、私はしまいには、すっかり気が変になってしまったほどだった。ちょっとここで言うておくが、結婚指輪が人間の顔を情け容赦もなく、ごつごつやるときのあの痛さを、私はどこの誰よりもよく知っていると思う。（7章）

これに対してビディーがジョーと結婚してからのあの最後の章に出てくる、ビディーの主婦として母としての完璧な姿を象徴している彼女の手と結婚指輪の対照的な描写を思い出さずにはいられない。

ビディーは自分の子供を見おろして、その小さな手を自分の唇に当て、子供に触れたそのやさしい主婦らしい手を、私の手のうちに置いた。その動作とそっと触れたビディーの結婚指輪の軽い感触には、なにかしら非常に雄弁なものがあつた。（59章）

ミセズ・ジョーの精神構造の基礎となっているのは、階級意識と権力主義である。自分が夫と弟との犠牲となっていることを理由に、家庭をカースト化している。自分だけがパンブルチュックを伯父と呼び、わずかな富と階級の差もはっきりと区別し、そのためにも自分の権利が少しでも弱められることは決して許そうとしない。

「お前の姉さんは天下でなくちゃいけないんだよ。」とジョーは言った。「つまり、お前やわしに対してだよ」……「それからな、姉さんは家なんかに学者がいることを余り好きじゃないんだ」とジョーは続けた。「特に、このわしが学者になることを、余り好きじゃないんだよ。わしが謀反でも起こしたら困るからなんだよ」（7章）

しとどめたつもりであっても、時はその支配の力を弱めようとはしなかった。時の流れに一身を委ねて年老い、枯れ、腐っていく人間や物の姿には一種の自然の安らぎと美しさを感じ、神々しささえ感じられるものであるが、黄ばんだウェディングドレスに身を包み、骨ばかりの朽ち衰えた老女の外見と、いつまでも過去の精神状態を持ち続けている彼女の未成熟な精神内面との不釣り合いは、時の持つ容赦ない力と同時に人間の愚かで醜いグロテスクなまでの執念との両方を、われわれに思い知らすに十分な威力を持っている。

彼女が感じ易い子供をとり上げて、自分の狂暴な憤怒とはねつけられた愛情と、傷つけられた誇りが、傷つけられる型に形づくったことは、悲しむべきことであつたということは、余りにもよくわかっていた。だが、日の光を閉め出したために、彼女はそれよりはるかに多くのものを閉め出してしまったこと、隔離生活において、自然な痛手をいやしてくれる無数の力から、われとわが身を隔離してしまったこと、彼女の物思いに沈む孤独の心が、創造主が定めたもうた道に背くすべての心が必ずなり、そしてならねばならず、今後もなるように、次第に病的になっていったこと——そういうこともまた私は同じようによく知っていた。しかも、私は応報の罰によって、あんなに痛ましい敗残の姿と化している彼女、懺悔の虚栄心、その他この世の呪いとなってきた恐るべき虚栄心と同様に、支配的なマニアとまでなった悲嘆の虚栄心の、化身ともいふべき彼女を、憐びんの情なしに眺めることができただろうか。

(49章)

上の説明にもあるように、彼女は光といっしょに多くのものを閉め出してしまい、何よりも彼女は呪いの時を忘れないために、他のあらゆる時を閉め出してしまった。と同様に、時の持つ滋養——人間の苦しみを癒す力——人間は時とともに忘れ、時とともに悲しみも苦しみも薄らいでいくという、あの時の持つ特効薬——からも自らを遮断してしまったのである。その姿は人生の敗残のそれであつて、この世のものではない。彼女は時間を作り出すことを否定し、前向きにそれを使っていこうとしない。彼女の腐れた精神の中では、時は全く狂ってしまって、過去に圧迫され、彼女の見る現在も未来もまるで狂った歪んだ映像の中にある。そのために、彼はエステラを使って自分を裏切った男全体に対して復讐を誓う。エステラの全人生が自分に託されているということを考えずに、娘の現在も未来も犠牲にして幼い娘に自分の呪いをのり移らせるのである。ここにハヴィシャムの矛盾があつて、またそのために時の与えた運命によって最も罰せられる結果となつた。棄て去つてしまつて、黒く塗りつぶしたはずの現在と未来という時を、彼女はエステラを手段として復讐という言葉にすり代えながらも、明らかに復讐という未来の瞬間を持とうとしたことである。そして実際に、無邪気なピップという子供をさらし者として、復讐の時を楽しんだことである。単に自分の問題で過去に閉じ込めてしまうなら、ミス・ハヴィシャムのように徹底的に運命の糾弾を受けることもなかったかもしれない。しかし、彼女は時を棄て去つたと言い、かつそのごとく振る舞いながら、一方では復讐という名の未来を持とうとしていたのである。彼女のこの矛盾は人間として決して許されるはずもないものであろう。

ミス・ハヴィシャムの過去に対する態度と似かよっているのは、ピップの姉であり、育ての親ともなっているミセズ・ジョーのそれである。彼女は両親が早く自分と幼い弟ピップとを残して死んでしまったために、幼い弟を養っていくのに困り果てて、自分より身分のずっと低い村の鍛冶屋と意に反した結婚をしてしまったと思ひ込んでいる。彼女は自分が本来ならばこんな愚鈍な無学なやさしいだけの頼りない、いくじなしと結婚するはずもなく、ずっと階級の上のまじな男と結婚できたはずであつたと思ひ込んでいる。この見込み違いの、いわば大いなる期待の挫折感

## II

どんな偉大な小説にも言えることであるが、この小説もその例にもれず、いろいろなテーマのもとにあらゆる角度から解釈がくり広げられている。しかし、ディケンズの他のどの小説よりもこの小説では「時」という得体の知れない怪物が人間の運命を左右していく様子が、特に力を入れて書かれているように思う。ある者は時に翻弄され、ある者は時を軽視し、ある者は時による一瞬の出会いを一生大事にして、その時から自分をより高いものへと変えていく、またある者は時のいたずらによって自分を見失い、盲目の旅を続けた後、同じ時のめぐり合わせによって自らの運命をもう一度再生している。時とは人間が止どめることができないで、ただ人間はそれに流されて身を任せる他に手段を持っていないが、その受身の人間の心の在り方次第でいかなる人生を生きることも可能ではないだろうか。時という運命の制限を持って生れた人間は、ある意味では身動きのとれない状態にあるといっても言い過ぎではないが、その運命の中に意味を見つけ、時の中に自分を見つめることによって受身であるはずの人生が能動的な力を持ち得るのである。

*Great Expectations* という題の *expectations* は「遺産」という意味と同様、もちろん、「期待」という意味を持っているが、主人公の報われない夢、間違った期待による悲劇は人間が過去——現在——未来という三つの異った時間の世界を持っている幸福と、たとえ持ちたくなくとも持たざるをえないという不幸との両面を示しているように思われる。ピップの夢が破れたということは、結局のところ現実には幻想に屈服してはいけないという自然の摂理ともいうべき、人間が生きていく上での大前提をわれわれに気づかせてくれている。現在は過去を越えることはできないし、未来は現在を抜かしては存在しない。他の言葉で言うと、思い出によって現在と未来を生き抜くことは相当に難しいことであるし、夢のために過去を棄て、現在を無視し、未来だけを考えて生きることも人間には許されないことである。そして、常に現実が思い出と夢との中央に、まるで大黒柱のように厳然とそびえ立っているということでもある。この偉大なる摂理の中あって、ただ一つだけ人間が自由を持つことが認められているのは、その人間が限られた時の中で自分をどんな風に生かしてもよいということ、そこに流れる限られた時間を、未来の末の死に至るまでどんな風に使ってもよいという点だけである。そんなにもちっぽけな自由の行使が、時と場合によってはあらゆる人間をも圧倒する尊厳に通じることもあるのだ。だから人間は時に振り回され屈服することなく、常に時と衝突を繰り返しながらも、前に向かって生きていかななくてはならないとも言えるのではないだろうか。

この小説の人間にとっての運命は、主に未来に対してどのような心構えを持っているかで決められている。裏返して言うてみるならば、ミス・ハヴィッシュもピップもマグウィッチもミセズ・ジョーも、過去という時間をどのように捉えるかによって未来につながる自らの運命を決定させられているとも言えるだろう。ミス・ハヴィッシュは彼女のフィアンセが結婚式の当日に彼女を裏切ったことを忘れることができない。彼女の *great expectation* の崩壊の日から、彼女は自分の部屋の時計を止め、外界からの光を遮ってローソクの光の中で、テーブルや床の上には黄ばんだ婚礼衣裳や色あせた品々をまき散らし、時を過去の一点に停止することで時の流れを塞ぎ止めてしまった。時の流れを一点に止めるということは、すなわち過去の連続の真只中に生きることであった。そこには現在も未来もなく、すべての瞬間が過去の連続である。しかし皮肉なことには、時をとどめたはずであった彼女自身、老い衰え、まわりにあるすべての物は朽ち、崩れ、壊れてしまっている。時はそれ自体の姿を持っていないが、嵐の過ぎ去った跡のように、物と場所と人間とにその過ぎ去った証拠の足跡を必ず残していくのである。彼女がいくら時を押

で語り手は次のようなコメントを添えている。

いっさいの美点は、私のものではなくて、ジョーのものだった。私が逃げ出して兵隊か水兵にならなかったのは、私が誠実だったからではなくて、ジョーが誠実だったためである。私に勤勉という美德が備わっていたのではなく、ジョーに断固とした勤勉という美德が備わっていたからである。やさしくて、正直な心を持つ、義務に忠実な人間の感化というものが世の中にどの位広がっていくものか、知ることはできない。だが、通りすがりにその力が自分の魂に触れたことを知るのは大いにあり得ることだ。もしも私の年季奉公のうちに、なにかの美点がまじり込んでいたとすれば、それはすべて朴訥な満足しきったジョーから生まれたものであって、落ち着きもなく野心に燃えて不満ばかり抱いていた私から生れたものではなかった、ということ私をよく知っている。(14章)

語り手は決して感情的にピップの行為や言葉を擁護することはしないで、客観的に冷静に分析することで、読者に House の言うあの“sympathy”を持たせ続けることができるのである。

サティス・ハウスがピップに与える影響については次のようにコメントしている。

こうした環境にあって、私はどうなったろうか？ こうした環境が私の性格にどうして影響せずにおられるだろうか？ ちょうどあの薄暗い黄色い部屋から太陽の光の中へ出てくるとき、私の眼がくらんだように、私の考えがボーとなったとしても不思議に思うことができるだろうか？(12章)

一方、時のギャップによる感情の変化も正直に語り手は述べている。

私は今、このことを軽い調子で話しているが、しかし私にとっては決して軽いことではなかった。人間並みよりはるかに低劣な軽蔑すべき不体裁きわまる、むつつり屋のまぬけなんかにはエステラが少しでも好意を示すなどと考えることが自分にとってどんなに苦痛だったかは、とてもここで言葉に表わせない。(38章)

まるで再生されたビデオテープを見るように、冷静にかつての自分を見ているピリップ氏も、まれではあるが時として、起ったでき事に非常に近く、主人公ピップとまるで一体となって語っている場面もある。そのようなときはもはや記憶の奥から思い起こす必要などなく、過去と現在の隔たりなど微塵も感じられない。語り手は自分自身も読者も今までのでき事もすべてを忘れて、過去の中にどっぷりとつかって、最初のときと同じ鮮烈さで再び同じ経験を体験しているのである。そこには批判も非難も冷笑も説明も入る余地がない。むしろ、淡々と描写していく中に、時を超越した瞬間が感じられる。マグウィッチの死の場面がそれである。

日が経つにつれて、私は彼が寝たまま光の消えた顔をして、白い天井を静かに見つめているのに、いっそう気づくようになった。私が何かひと言言うと、その瞬間、顔に輝きがさすが、やがてまた消えていくのだった。ときとすると、ほとんど口を開くことができない、いや全然口のきけないことがあった。そんなとき、彼は私の手をかすかに握りしめて、私に答えるのだった。こうして、私は彼の気持をとてわかるようになった。……彼は非常に苦しげに呼吸をしながら、あお向けになって寝ていた。彼がどんな努力をしてみても、またどんなに深く私を愛していても、彼の顔からは光がしょっちゅう消え、白い天井を見つめている彼の穏やかな眼差には霞がかかった。……彼は最後のかすかな力をふりしぼって——もしも私がそれに応じて、助けてやらなかったらそうする力はなかったろうが——私の手をもち上げて、唇にあてた。それから、そっとまた自分の胸の上におろして、その上に自分の両手をのせた。白い天井を見つめる穏やかな眼差がまたもどってきて、消えた。そして、彼の頭は静かに彼の胸におち沈んだ。(56章)

私を手塩にかけて育て上げたからといって、私を引っぱったり、つねったりして育て上げる権利は少しもないのだというのが、私の深い信念だった。私は私が受けたあらゆる罰、屈辱、絶食、寝ずの夜、そのほかの懲罰的な苦行を通してこの確信を抱いたのである。私が精神的に臆病で、非常に感じやすかったのも、もとを正せば私が寄る辺なく、一人ぼっちで、常にこの確信を心に抱いていたことによるものである。(8章)

上のような子供とその環境についての明析な分析からもわかるが、ピリップ氏は不正に対する憤りと臆病な気質の間に揺れるピップの運命をしっかりと見つめている。確かにこの語り手の視点は若きピップの感情からはほど遠いものではあるが、読者にピップの行動の源泉を説明分析し、少しでも納得してもらおうとしている語り手の様子がひしひしと窺い知られるものである。さらに、すべての遺産の見込みが消えた後で、ピップが大病にかかったとき、ピップが快方に向かうにつれてジョーのピップに接する態度がだんだんごちなくなってくる。このときのピップの心理を語り手は次のように補足し告白している。

ああ！ 私はジョーに自分の誠実を疑わせ、順境になったら彼に冷淡になり、彼を振り捨ててしまうであろうと考えさせる理由を少しも与えなかっただろうか？ 私はジョーの無垢な心に、私が力がついてくればくる程、私に対する彼の力はそれだけ弱まっていくだろうと、私がまだ彼から身を振りもがないうちに早く手をゆるめ私を放した方がいいと、直観的に感じさせる理由を私は少しも与えなかっただろうか？……私は私でまた考え込んでいた。なぜといって、次第に大きくなっていくジョーのこうした変化をどうして押しとどめたらいいかということは、良心の苛責にたえない私にとって大きな謎であったからである。私がいまどんな立場にあるか、どんな境遇におちてしまったかをはっきりジョーに話すことが恥ずかしかったということを私は隠そうとは思わない。だが、この私のすすまぬ気持は全く賤むべき気持ではなかったと今私は思う。私には彼がきつとなけなしの貯えを投げ出して私を助けようとするだろうということがわかっている。そして、彼は私を助けてはならない、私は彼にそんな思いをさせてはならないのだということが、わかっていたのである。(57章)

ピリップ氏は懸命に過去の自分の心理状態を思い出そうとしている。そして、正直にそのときの心の動きをここで一つ一つ語ることが、とりもなおさず現在の自分というものの再確認とこれからの自分を造っていく足がかりとなると思っているかのごとくである。ピリップ氏は完全に成熟して過去自分を掌握しきっている。それはちょうど夢から覚めて、かぼちゃの馬車から降りたシンデレラが再びもとのぼろを着た娘となり、すすけた勝手の片隅で、昨日の舞踏会の自分の姿を思い浮べているようなものである。シンデレラは決して自分から再び美しく着飾った姿になりたいとは思わない。魔法をもう一度使ってほしいとも望まない。夢は夢のままで、あるがままの自分に戻って、ぼろを着て片隅で一瞬の幸せを思い満足しているのである。そのような心がけだからこそ彼女には魔法のガラスの靴がぴったりと合い、王子に迎えられて真の幸福を得ることができたのだ。シンデレラと違って、ピップの魔法使いのおばあさんには悪意があったし、ピップの夢は幻滅となって終わったが、語り手ピリップ氏の心境はやはり魔法から覚めた後のシンデレラの無の境地に似ているようだ。先ず夢の中の自分を正直に克明に分析して、そして後に夢から覚めた自分をいかに未来へとつなげていくかを真剣に考えている。そこにはやはりシンデレラの冷静さと同種の心の動きが見られるのである。

若きピップはジョーからいかに大きな影響を受けたかを理解していないが、語り手はジョーのピップに及ぼした影響がどんなに絶大であったかを十分に承知している。ピップはミス・ハヴィシャムの家に行ったら、ジョーと彼の家庭に対する価値観を全く転倒させてしまうが、その場面

自分はジョーに迷惑をかけるだろう。ミス・ハヴィシュムの屋敷へあんまり遠くなる。あの方は几帳面だから気に入らないかも知れない、などと口実を作り始めた。(ビップ)世界中の一切の偽贋家も自己偽贋家に比べたらものの数ではない。私はこんな口実で自分を欺いたのである。実際妙なことだ。もし私が誰か他人の偽造した半クラウン銀貨を知らずに受け取ったというなら、無理もないことである。だが、自分で作った贋金をそれと知っていて本物の金だと思ふなんて、！(語り手) (28章)

エステラへの報いられない愛に対するビップの感情にピリップ氏は少々はがゆい気持を持っているようである。

私たちの交際はなにもかもみんな辛いことばかりだった。彼女が私にどんな調子で話しかけたとしても私はそれを信頼したり、その上に希望を描いたりすることはできなかったのである。それなのに、私は信頼にも背き、希望にも背いて続けていったのである。いまさらそんなことなどなぜ一千回も繰り返すのか。いつだってそうだったではないのか。(33章)

語り手の苛立ちは主人公ビップが報われぬ恋に燃えれば燃えるほど、あせればあせるほどますます強くなる。彼の苛立ちは現在の語り手の理性が過去の感情に対して示した反応である。語り手の感情は大抵の場合抑えられ冷静なものであるから、それがなおさら語り手と主人公の感情のギャップを目立たせる効果ともなっている。

ディケンズがピリップ氏にビップの物語を語らせたこのやり方は、主人公の内面独白を避けた独特のものである。内的独白を用いていない代わりに、成熟したピリップ氏の言葉を種々な角度から挿入することによって、時制の用い方、時のつながり方に細心の注意を作者は払っている。過去の描写は過去形で、また劇的な場面は現在形を使い、未来時制は語り手が使うためにだけにとっておかれている。代名詞“I”がいろいろな用途で使われていることによって、内的独白の雰囲気が出てはいるが、実際には非常に巧妙に用いられており、“I”という言葉のあいまいさが小説全体を覆っている一方で、明確な時のギャップがそのあいまいさの奥には潜んでいる。

さて、ピリップ氏がビップの道徳的糾弾者としての役割を持っているということは今までに述べてきたが、以下に挙げるようにビップの心理状態に対するすべてを見極めた立場での分析的なコメンテーターとしての役割も同様に必要である。ビップは囚人マグウィッチ (Magwitch) のために食物とやすりを家から盗んだ罪の意識を持っているが、そのことについて中年のピリップ氏は次のように解説している。

私は思いがけなくこそ泥の罪から釈放されたが、そのときの気持ではそのことを正直に打ち開けてしまう気にならなかった。しかし、その気持の根底にはいくらか良いところがかけらぐらいはあったと私は思う。……ひと口に言ってしまうと、私は臆病すぎて悪いと知っていることも、避けることができなかったように、余り臆病すぎて正しいと思うこともできなかった。その頃の私は世間とはまるで交渉がなかった。だからこのように振るまう世間の人々のまねをしたわけではなかった。全く教えられずに学んだ天才だった私は、独学でそういうやり方を発見したのだった。(6章)

8章では環境によって育まれたビップの性格を冷静に大人の眼で分析している。

姉の育て方は私を過敏な子供にしてしまった。誰が子供たちを育てようとも、子供たちが生きている小さな世界では不正ほど敏感に知覚され、感じられるものはない。子供がさらされるのはほんの小さな不正かも知れない。だが、子供は小さいものであり、その世界も小さいものである。その木馬は物差しで計れば骨の太いアイルランド猟犬の丈しかないのだ。私自身の内部で、私は赤ん坊のときから不断の不正に対する戦いを続けてきた。……たとえ姉が

この引用の前半は過去形で語られ、主人公ピップの皮肉的な感じ方をそのまま言葉に表わしたものであるが、後の部分は現在形で語られており、清潔さに対する語り手のこれも冷笑的な一般的な見解を付け加えている。

さらに語り手の少年ピップからの精神的距離感は、ピップの道徳的誤りに対して非難の声としての役割を語り手に負わせる効果を荷なっている。語り手である中年ピリップ氏は読者の心がある場所に共に在る。語り手は特別の同情心を若き自分に示さずに、彼の分身を見つめている。そのために語り手の主人公からの遊離にもかかわらず、却って読者と語り手と作者は三者一体となって同じモラルティという共同体の中に入れられることになる。ジョーがピップを連れてミス・ハヴィンガムを初めて訪ねたとき、語り手はピップがジョーの粗野な態度を恥じていたことを告白している。

私は（語り手ピリップ氏）思うのだが、自分が（若いピップ）あの懐しい善良な男を恥ずかしく思いはしなかっただろうか。いや確かに、私は（ピリップ氏）知っている。エステラがミス・ハヴィンガムの椅子の後に立っているのを見たとき、私は（若いピップ）ジョーを確かに恥ずかしく思ったのだ。（13章）

このように若い頃の主人公ピップは語り手であるピリップ氏の非難にたびたび直面している。この過去と現在との摩擦は一つの価値観に対する広がりや深みのある見方を読者に提供する。語り手は主人公を非難するばかりでなく、「いったい私は何か事が起った場合に、いつも正しいことと間違いとの間をふらふらふらつきはしなかっただろうか」と自問することも忘れてはいない。彼の言葉には常に過去と対決する覚悟が含まれている。彼にとって過去と闘うことは決して恥でも苦しみでもなく、現在の自分に至る道程を確認するという義務と自信とが滲み出ている。たとえばピップが遺産相続の見込みを告げられて、ビディ（Biddy）やジョーに話したときの彼ら三人の描写を次のようにしている。

彼ら（ジョーとビディ）の一人が全く楽しそうな様子でなく私を見ているのに気がつくと、（彼らは特にビディは 何度も何度も私の方を見ていたが、私は腹が立ってきた。まるでジョーもビディも私を疑っているような気がしたからだ。彼らが言葉にも態度にもそんな様子を決して見せなかったということは、神様がよくご存知であるにもかかわらず。（18章）

また別の場面で、ピップがビディに自分が財産を手にしたらジョーを立派な社会に移してやろうと思っていると自信に満ちて言ったとき、ビディはそれに対して、「あの人は誇りを持っていて、あの人が満たす力がありそして立派に敬虔な気持で満たしている地位から、自分を引き離すことなど、誰にも許さないかも知れないわ」とジョーに対するピップの思い上がりをたしなめる場面があるが、このときピップは、「あんたにそんなところがあるなんて本当に残念だよ。あんたは羨ましいんだろう。そして妬んでいるんだろう。あんたは僕が幸運な身になったことが不満なんだ。そしてそれを表わさずにいられないんだ。それは人間性の悪い一面なんだよ。ビディ」と反発する。しかしその後の語り手のコメントは明らかに、「人間性の悪い一面」を証明するのはビディではなく、ピップ自身であったということを現在の立場を利用して語っている。

私はもう一度、それは人間性の悪い一面だということを、熱心に繰り返した。（ピップ）

その後私は誰にそれが当てはまるかということを差し控えれば、私が言ったことが正しかったという理由をそれ以来ずっと見てきたのである。（語り手）（19章）

さらに28章ではロンドンに出て紳士となったピップがミス・ハヴィンガムに会うために故郷に戻るとき、心の中で何とかジョーの家に泊らなくて済むように自分に口実を作らせる。それに対して語り手は厳しくピップを糾弾している。

このアイデンティティを探す道程が人物たちの精神遍歴の道である<sup>2)</sup>。ピップもやはりその例外ではないが、語り手ピリップ氏によってこの小説の方向は随分と違うものになっていることは確かである。

幼いピップがハヴィンシャム (Miss Havisham) とエステラ (Estella) の住むサティスハウスに初めて行ったとき、ミセズ・ジョー (Mrs. Joe) やパンブルチュック (Pumblechook) がその様子をピップから根ほり葉ほり聞き出そうとするが、そのときピップは彼ら大人を前に大嘘をつく。

「僕たち旗を持って遊んでいたんです」と私は言った。(ちょっと一言いわせていただくが、このとき私が口にしたいいろいろな嘘を思い出すと、われながら驚かすにはいられない。)二人は(ミセズ・ジョーとパンブルチュック)私を眼を丸くして見つめていた。私もいかにも無邪気そうな顔つきをこれ見よがしにして、彼らをじろじろ見ながら右足のズボンに右手でひだをつけていた。(9章)

上の引用で見られるように、語り手はピップと自分を少しも一致させていない。ピップの大胆さに驚愕しているのはミセズ・ジョーとパンブルチュックだけではなく、語り手自身も大人の驚きで眼を見張りながらピップの話を語っている。しかし同時にミセズ・ジョーとパンブルチュックの当惑を痛快な気分で眺めているのも同じ語り手である。

一方、子供らしい表現を使っている中で、ときどき明らかに語り手の大人の言葉であると思われる表現が七歳の子供の観察の中に混入している箇所がよく見つけられるのも面白い。

彼女(ミセズ・ジョー)が眼をそむけると、こんどはこっそり二本の人さし指を十文字に組んでジョーは私に見せた。それはミセズ・ジョーは御機嫌が悪いぞという合図だった。ところが彼女が御機嫌が悪いのはいつものことだったので、ジョーと私の指はちょうど十字軍騎士の記念碑の足みたいに、何週間も十文字に組まれたままのことが度々であった。(4章)

特に比喻を使うときに気がつくのであるが、田舎の知識のない七歳の少年のものとは思えない表現がしばしば出てくる。以下に挙げるのもその良い例となるだろう。

私はスペインの闘牛場の不幸な小牛みたいなもので、こうした精神的なつき棒をいやという程くらわされたのである。(4章)

私たちは町へ歩いていった。姉はとてつもなく大きなビーバーの毛皮で作った帽子をかぶり、まるで麦わら真田で作った国璽のようにかごをかかえ、晴れわたったすばらしい天気にもかかわらず、靴の上にはく木履、肩かけ、そして洋傘を持って先に歩いた。これらの品物を懺悔のつもりで持っていったのか、それとも見せびらかすためだったのか、はっきりしないが、恐らく——野外劇や行列行進で、クレオパトラかそれとも誰か他の怒り狂える女王がやるように——立派な持ち物として見せびらかしたかったのだらうと思う。(13章)

子供らしい無邪気な観察眼や子供独特の鋭い感覚だけではもの足りず、大人の語り手の豊富な知識と経験とを混合することによって、物語の視点をいっそう複眼的なものにしている。今までのものは単に観察描写にとどまったものであるけれども、これから引用するのは若い頃のピップと大人になったピリップとの時間的ギャップを使って、過去と現在の眼の並存によるアイロニーを作り出している良い例となるだろう。

ミセズ・ジョーは非常にきれい好きな主婦だったが、彼女はきれい好きを汚れよりももっと落ちつかない、もっと迷惑千ばんなものにしてしまう、すばらしい腕前を持っていた。(若いピップの声) きれい好きなんて、いわば信心と同じようなもので、人々の中には自分たちの信心をこれと同じように扱ってしまうものがよくある。(語り手の声) (4章)

年時代に対する語り手のノスタルジアが読む者の心に新鮮な感動をもって訴えかけてきた。一方、エスターの幼年時代は彼女の受けた心の傷とそれによる罪の意識とが彼女の性格に及ぼした屈曲を読者に伝えるための非常に有益な材料となっていた。つまり、エスターという語り手は主人公エスターの人格と切り離しては存在しなかったのである。しかし、「大いなる遺産」では中年の落ち着いた成熟した紳士、語り手のピリップ氏は「決して大規模な仕事をしていなかったが、評判がよくて利潤も上がり、非常に順調な」クラリカー商会のビジネスマンである。彼は十一年間に及ぶ海外の仕事から帰って、今物語ろうとしている事項から相当な年月を経て、鍛冶屋の子供だった数奇な自分の人生を振り返っているのである。彼は自分の過去を次のように捉えている。

私は私の生涯において、かつて最も大切な場所を占めていたもののことはどれ一つとして忘れたことはない。そして、とにかく私の生涯に占めていたどんな場所のこともほとんど忘れはしない。しかし、私がかつてそう呼んでいたあの哀れな夢はすべて過ぎ去ってしまった。すっかり過ぎ去ってしまったことなのだ。(59章)

上のように述懐しているように、語り手ピリップ氏にとっての過去は記憶というフィルターを通して過ぎ去った世界なのであって、その世界で怯える少年ピップや期待に胸ふるわせ、失望に泣き暮れる青年ピップは、経験を経て人生の知恵を身につけたピリップ氏とはまた別の人格として扱われている。この物語を書くことはピリップ氏にとってはちょうど自分の人生の再生されたビデオテープを眺めているようなものであったように思われる。

過去を振り返り、我にかえて過去を眺めるとき、当時は無意味と思われたような事柄にも何らかの意味を発見することができる。このとき人は自分の過去の歴史に対して一つの意味付けを行うのである。そこに意味を賦与するのは現在のピリップ氏であって、現在彼が持っている価値体系が基準となっている。彼にとって過去を振り返ることは現在を確認することにもつながり、さらに未来の自分の生を意味あるものにしようとするにも通じている。この意味において、「大いなる遺産」の主人公で語り手でもある人物は、常に自己存在の確認を行っている。ピリップ氏はかつての自分の主義、弱さ、長所、幼さ、欲求などをすべて自分なりにしっかりと把握している大人である。これは語り手ピリップ氏と語り手エスターとの大きな違いであろう。エスターにおいては彼女の心理状態が未熟で不安定であること自体が臨床心理学の格好の材料となっている。一方ピップの不安定さ、弱さは心理学的に病的なものではなく、いわゆる人間誰でも陥りがちな誤ちである。それを乗り越えた語り手は堂々としていてすがすがしい。ピップとピリップ氏との隔りが大きければ大きいほど、読者は安心して小説を読んでいることができるし、それを前提として気楽にピップに自分を一致させ、主人公と喜怒哀楽を共にすることができる。一方、エスターの場合は語り手自身が不安定な神経衰弱ともいうような心理状態であるから、読者はうっかり視点を一致させてしまうと、そこに読者の価値観との矛盾が常に顔を出してきてしまうのである。読んでいて少しも安心ができないのだ。

語り手ピリップ氏は自分の過去をさまざまな視点から見ていて、あるときは冷笑的なからかい半分の調子で、あるときは批判したり非難の調子を込めて、また別の所では無関心な様子で皮肉な口調で語ったり、時には感情的に同情的な表現を用いたり、あるときは教訓的で厳粛な口調で語っている。一方、子供らしい感じ方をそのまま思い出しながら生き生きと綴っている場合も随所に見られる。したがって、これらの視点と主人公と語り手との隔たりの変化とが前に述べたような「主人公の自己把握の確かさ」によって、小説により一層の深みと面白みを与えることになっている。ディケンズの小説に出てくる魅力ある人物たちの多くはこの自己把握というか、言いかえると自分は何物であるかというしっかりしたアイデンティティを持っていない。逆に言えば、

## ディケンズの一人称小説に見る、「私」と運命 (2)

——失われた時を求めて——

滝 裕 子

### I

前回の紀要ではチャールズ・ディケンズの一人称小説に現れた運命と主人公の生き方について、特に後期の小説「寂しい家」(*Bleak House*)の女主人公エスター (Esther) の心理構造を分析しながら論じたが、本論では、更に進んで一人称小説としては最後の「大いなる遺産」(*Great Expectations*)の主人公ピップ (Pip) について、やはりその運命と生き方を中心に分析してみたいと思う。ディケンズが主人公の人物像とその描写法について尽きることのない意欲を燃やしていたことは、「寂しい家」に引き続き「大いなる遺産」で三たび一人称の語り手を採用したディケンズの手法を見れば更に明らかとなるはずである。

H. House は彼の著書 *Dickens' World* において「大いなる遺産」について次のような批評を述べている。「「大いなる遺産」の最後の不思議はピップがジョーを全く無視し、ビディーに冷たくし、彼らが原因で何度も何度も悔恨を繰り返して自分で自分を責め合ったにもかかわらず、最後にはピップは最初よりもずっと善良な人間になって現れるように作られているということである。えせ紳士の遍歴の間ずっと読者の同情の心を保持していたとは驚くべき偉業である<sup>1)</sup>」このように House の言う「読者の同情の心」(reader's sympathy) をいかにこの小説が保持し続けていたかということは、この小説の、ひいてはピップという人間像の魅力を解く鍵となると思われる。このことは語り手ピリップ氏 (Pirrip) と主人公ピップの関係解き明かすことと無関係ではない。この二人の人物——敢えて二人ということにするが——は、本当は同一人物であるから一人であるはずだが、単に成人した語り手が一人称で幼い頃の自分のことを語るというような単純な設定であるとは思えないのである。語り手はすべて主人公の心理を知り尽くしていながら、非常に彼から遠く隔たった所に存在している。したがって彼らが同一人物で同じ代名詞 “I” を使っているため、ともするとまるで「私」が自分の経験と罪の苛責を感情的に告白している内面心理小説のように読まれがちであるけれども、決してそのような読み方をこの小説は読者に要求してはいないのである。むしろ、語り手フィリップ・ピリップと主人公ピップとの距離が、年齢的にはもちろん心理的にどれ程隔たったものであるかを見ることが、House の言う “不思議さ” を解決する鍵となると思われる。

今まではデイヴィッドにしてもエスターにしても、それぞれ異った立場や環境ではあったが、話し手としての役割と主人公としての自分の感情とを切り離して考えたり、観察したりしてはいなかった。デイヴィッドの子供時代では完全に語り手と主人公が一致して感情を共にしており、幼